

巻頭言

第75回日本医学放射線学会総会を開催するにあたって

第75回日本医学放射線学会総会 会長
北海道大学大学院医学研究科病態情報学講座核医学分野 教授
玉木 長良



玉木 長良 先生

2016年4月14(木)-17(日)の4日間、パシフィコ横浜において、第75回日本医学放射線学会総会を開催します。第72回日本放射線技術学会総会学術大会、第111回日本医学物理学会学術大会、および2016国際医用画像総合展も同時に開催され、今年も2万人を超える参加者が見込まれます。

メインテーマは [Instructive, Innovative, and Integrative Radiology] (まなび、のぼし、つなげる放射線医学) としました。これからの放射線医学の発展には、この3つが大きな要素となると考えます。次世代を支える次世代の人材育成 (Instruction) が学会活動の基盤となります。魅力ある教育プログラムには、必ず人が集まります。また新しい技術革新 (Innovation) が、今後の放射線医学の発展に不可欠です。この最先端の放射線医学の技術を紹介する学会の役割は、重要性を増します。さらにはこれからの医学放射線学会の発展には、視野を広げて技術学会、物理学会をはじめ、さまざまな医療の分野や理工系や生命科学系との連携 (integration) がこれからの放射線医学の発展の鍵を握ると考えます。

プログラム編成では、今後求められる領域間の連携や異分野との連携を盛り込みました。シンポジウムでは画像診断と治療、核医学と治療、治療と分子イメージング、IVRと画像診断など、横断的な内容をできるだけ取り入れるように工夫してみました。また特別企画として、最近注目されているQIBA (Quantitative Imaging Biomarker Alliance) を取り上げました。また海外で活躍する日本人を囲んで“海外を目指す人へ”と題した特別企画も用意しています。

1. はじめに

本学会も3四半世紀を迎える記念すべき大会となりました。この節目にあたり、過去を振り返るのではなく、むしろ次の四半世紀の発展を占うような内容を企画しました。これからの学会活動は、世界の視点にたった地球規模の繁栄が求められるでしょう。その意味でポスターにはあえて地球を選びました。この学会を通して日本から世界に向けて数々のメッセージを発信したいものです。学会の合同特別講演には、女性宇宙飛行士の山崎直子さんに“宇宙、人、夢をつなぐ”と題した夢のあるご講演をいただく予定です。この学会でも地球規模で、人や夢をつないでいけるような放射線医療を推進したいものです。



Fig.1 第75回日本医学放射線学会総会ポスター

2. 会場

この数年、学会参加者が増加しつつあります。特に国際化を目指している学会として、アジアを中心に参加者が増加していることも注目されます。

基本的なレイアウトは第73回、第74回総会を踏襲しています。会場では常に英語のセッションが1, 2継続して設けられています。シンポジウムや海外招待講演などはできるだけ、国立大ホール、メインホールや301～303の大きめの会場に集めました。他方、教育講演も多く聴衆があります。こちらはアネックスホールに集中しました。できるだけ参加しやすい環境に配慮して部屋割りしたつもりです。本学会に参加されたすべての方々が、日常の教育研究活動や診療に役立てていただくと共に、今後の日本の放射線医学の発展に寄与していただけることを願っています。

3. 参加登録

参加登録費は会員13,000円、非会員20,000円、学生1,000円です。

4. プログラム

日本医学放射線学会は、学会の国際化に力を注いできました。すでに一般演題の発表スライドは英語にしています。講演発表も昨年には40%程度が英語化されています。これまでの取り組みが功を奏して、海外からの参加者が増えています。一般演題募集は締め切りましたが、600題の一般演題の中で、海外からの演題が27にも上り、著明な増加が特記されます。

今回はシンポジウムの英語化に着手しました。これをけん引するため、ほとんどのシンポジウムの直前には、その内容に関連の深い海外からの招待講演者にKeynote Lectureをお願いすることにしました。もちろん教育中心のシンポジウムや、本音を日本語で語りたいという強い希望のあるシンポジウムは、日本語での発表にしています。他方、約半数のシンポジウムがこちらの要望を取り入れていただき、英語での発表や総合討論が行われることになりました。これによりKeynote Lectureを担当される先生にも総合討論に参加していただけるようにしました。前述の通りシンポジウムのテーマとしては、画像診断と治療、核医学と治療、治療と分子イメージング、IVRと画像診断など、横断的な内容をできるだけ取り入れるようにしました。まさにIntegrationを意識した試みです。また循環器内科や脳神経外科の先生方にもシンポジウムに参加していただいています。診断、治療、核医学、IVRといった専門領域の方々が、それぞれの最先端の情報を提供しつつ、お互いに意見交換をしていただきたいと願っています。さらには領域を超えた異分野の方々と、活発な討論を展開されることを期待しています。

今回の学会では34名にも及ぶ海外講演者を招待しています。その中で、8名の海外で活躍しておられる日本人にもご参加いただく予定です。皆さんには他の海外招待講演者と同様、欧米での臨床・研究活動に関する招待講演を英語でお願いしています。またこれに加えて、これから海外に向けた活動の展開を希望している若手の学会員を集めて、この8名の方々から留学体験や、欧米での放射線医学の現状



Fig.2 北海道大学大学院医学研究科病態情報学講座核医学分野

などを日本語で紹介していただくインフォーマルな特別企画を予定しています。種々の経験談の紹介と共に、質問や意見交換の時間を十分にとる予定です。最近の日本からの海外留学生の減少傾向を危惧するこの頃ですが、これに対抗して、このセッションに参加される海外留学を目指す多くの若手医師、研究者が、海外で活躍しようという動機につながっていただければ、と願っています。

もうひとつの特別企画として、最近注目されているQIBA (Quantitative Imaging Biomarker Alliance) を取り上げることにしました。これは画像診断を単に画像として読影するだけでなく、定量的解析を行い、その精度を高める取り組みを行い、新規のバイオマーカーとして臨床に利用しようとする国際的活動です。医学放射線学会でも最近QIBAについての取り組みを進めています。2015年の秋季臨床大会

で江原茂大会長が取り上げられ、RSNAのQIBAの会長が講演されていました。今回の私たちの学会でも新しい会長をお招きし、日本での取り組みを紹介しつつ、QIBAの代表者と意見交換を行おうとする試みです。これが実現することで、画像診断の治療戦略への新しい足がかりにつながると期待しています。

5. おわりに

日常診療に追われておられる多くの会員の方に、教育講演や教育的な内容の濃いシンポジウムなどで日常臨床に役立つ知識を整理していただきたいと思います。また別のセッションでは領域横断的なシンポジウムや海外招待講演などで、最新の知識をリフレッシュしていただきたいと願っています。

多くの方々のご参加を心からお願いする次第です。

